

2023 年 2 月 19 日（日）「賜物と弱さ ～エペソ教会への愛の呼びかけ～」

ヨハネの黙示録 2:1-7

1 エフェソにある教会の天使に、こう書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる。2 「私は、あなたの行いと労苦と忍耐を知っている。また、あなたが悪しき者たちに我慢できず、自ら使徒と称して実はそうでない者たちを試し、その偽りを見抜いたことも知っている。3 あなたはよく忍耐して、私の名のゆえに忍び、疲れ果てることがなかった。4 しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めの愛を離れてしまった。5 それゆえ、あなたがどこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。悔い改めないなら、私はあなたのところへ行行って、あなたの燭台をその場所から取りのけよう。6 しかし、あなたには良いところもある。ニコライ派の者たちの行いを憎んでいることだ。私もそれを憎んでいる。7 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の樂園にある命の木の実を食べさせよう。』

【序論】

月並みな言い方ではありますが、私たち人間には長所と短所があります。これらは自分の顔の表と裏に見えなくもありませんが、実は紙一重であることが多い。長所が行きすぎて短所として現れてしまうこともあれば、思いがけないところで短所が良いことのために用いられることもあります。大らかな人の部屋が散らかり放題ということもあれば、塵一つ残っているのも許せない人が他人を裁きやすいということもあるでしょう。これは教会の特徴としても当てはまる場所があるかもしれません。地域性、牧師の性格、役員メンバーの考え方、集まった信者さんたちが歩んでこられた背景などによって教会は形成されるものですが、力を発揮しやすい部分と罪に陥りやすい部分とが背中合わせであることが少なくありません。

【本論】

今日から黙示録 2 章に入ってまいりますが、3 章の終わりまでに七つの教会が登場することになります。これらの教会が抱えている問題を見ていくときに、今申し上げたことが当てはまる場所が少なからずあるように思います。今日は第一のエペソ教会を見てまいりましょう。

本論 1. エフェソ教会の成立

エフェソにある教会の天使に、こう書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる。（2:1）

筆頭にエペソ教会が挙げられるところに、著者ヨハネとの関係の近さが感じさせられます。伝承によるとヨハネはエペソ教会の長老だったようで、長い期間そこで責任を負ってきたのでしょう。最初にエペソの町に福音を伝えたのはパウロであり、それに関する記事は使徒 18 章のパウロの第二回伝道旅行のところに書かれています。このときパウロはコリントからエルサレムへ向かう途上にありましたが、一時的に立ち寄ったエペソにてユダヤ会堂でユダヤ人と論じた程度であり、比較的すぐにその町を後にしたようです（使徒 18:19-21）。時期としては紀元 52 年頃と考えられています。パウロは第三回伝道旅行のときにもエペソに立ち寄り、この町を中心に 2 年以上に亘って伝道しました（使徒 19 章以下）。このような経緯を経て設立されたエペソ教会は、1 世紀の終わり頃までには 40 年前後経過していたと思われますので、例えるならば多摩ニュータウンキリスト教会や当教会と同じくらいの歴史を刻んできていたと言えるでしょう。ヨハネが所属していた教会は、その歴史のどこかで枝分かれ的に生まれた地域教会の一つであったと考えられます。その意味で当教会と似ていなくもありません。

エペソの町の特徴について少しふれておきましょう。エペソは小アジア第一の商業都市であり、良い港があったため経済的に繁栄し、政治的にも宗教的にもその地域の要となっていました。この当時、人口は既に 25 万人を超えていて、2 万 5 千人を収容できる劇場もあったようです。また、豊穡の女神アルテミスの大神殿がエペソの町のシンボルのようにそびえ立ち、異教的な礼拝の中心地となっていました（使徒 19:27-35）。しかし、宗教事情は複雑で、皇帝礼拝も行なわれており、ローマ皇帝クラウディウス、ネロ、ドミティアヌスらのための神殿も建てられていたといえます。このような宗教混交の町で唯一なる神を宣べ伝えていくことは、容易ならざることだったと思われます。

このエペソの町の教会に向けてヨハネはパトモス島から手紙を書き送ったわけですが、彼は教会の主であるイエス・キリストの代弁者として、伝達されたことばそのものを記しました。「**右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方**」とは主イエスを指しますが、「**星**」とは御使い、「**燭台**」とは教会を意味すると思われます。「**七**」は完全性を表し、全世界を代表する小アジア地区の七つの教会という意味が込められているようです。一つひとつの教会に守護天使が仕えていると説明する人もいますが、私は「天使」「燭台」とはいずれも「教会」の言い換えではないかと考えています。主イエスは教会を人格的な存在として見ておられる。ご自分のからだとして、対話可能な存在として、各々の群れに語りかけておられるのです。その教会の状況を深く知り、どのような助言が必要であるかをよく認識しておられました。良いところも弱いところもご存知であり、ご自分のからだとして整える必要があったのです。

本論 2. 称賛

まず、エペソ教会の称賛される面から見てまいりましょう。今日の箇所には三つのことが描かれています。

① 行いと労苦と忍耐

私は、あなたの行いと労苦と忍耐を知っている。(2:2a)

これだけでは具体的に何を指すのかは分かりませんが、エペソ教会の信徒たちは何らかの迫害に遭いながらも信仰に立ち続けたのでしょう。また、この後明らかにされていくように、偽りの教えを見分けることにおいて鋭い目を持っていたようです。

② 偽使徒の見極め

また、あなたが悪しき者たちに我慢できず、自ら使徒と称して実はそうでない者たちを試し、その偽りを見抜いたことも知っている。(2:2b)

偽使徒が教会の中に入り込み、異なる福音を説いていたようです。しかし、信徒たちは最初に教えられた真理に照らして、その偽りを見抜きました。パウロがエペソの長老を集めて告別説教を語ったとき、群れを荒らす者が現れるだろうと予告していた箇所がありますが、果たしてその通りになりました。

私が去った後、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、私には分かっています。また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。だから、私が三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。(使徒 20:29-31)

パウロは、エペソという地域柄、宗教混交が教会内で起こることを懸念していたのです。しかし、このように警告を受けていた信徒たちは、注意深く教会内の見回り続け、偽教師が出てきたときに直ちに退けました。それがどのような教えであったかはいくつかの可能性がありますが、6節に照らして理解するのが最も自然でしょう。

③ ニコライ派の行いへの憎悪

しかし、あなたには良いところもある。ニコライ派の者たちの行いを憎んでいることだ。私もそれを憎んでいる。(2:6)

エペソ教会をかき乱していた一つの教えとして「ニコライ派」という名称が挙げられています。この教えについての情報は少ないなりに、いくつかの可能性があります。

- ・ 使徒 6:5 に出てくるエルサレム教会の七人の執事の一人ニカノルの従者を名乗り、偶像への供物を食べることや偶像礼拝への参加を許可していた。
- ・ 「ニカオー（勝利する）」と「ラオス（民）」から成る名称で、自らを「勝利する者」と自称していた。
- ・ 善悪二元論の立場に立ち、肉体は悪であるが霊は善であるから、霊的に救われた者は何をしてもキリストに赦されているとして、不倫を勧めていた（グノーシス主義の一形態）。このように並べてみると、第一世紀の異端傾向の多くを含んでいるように見えます。小アジアの諸教会の中には「バラムの教え」(2:14-15) とか「イゼベルの従者」(2:20-22) による惑わしもあったようですが、これらと同一視する人もいます。いずれにせよ、教会を内側か

ら巢食う異端が乱立していたことは確かでしょう。エペソ教会はそのような教えに惑わされることがありませんでした。主イエスはこの点で評価しておられる。

本論 3. 叱責

しかしながら、それほどの洞察力を持っていた教会でありながら、叱責の部分では恐ろしいことが宣告されています。

しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めの愛を離れてしまった。それゆえ、あなたがどこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。悔い改めないなら、私はあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけよう。(2:4-5)

「初めの愛から離れてしまった」とは何を意味するのでしょうか。エペソ教会が設立された当初、信徒たちは深い霊的な交わりを神と人との間で構築していた。そのことが窺われるパウロのことばがあります。

こういうわけで、私も、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖なる者たちに対する愛とを聞いて、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。

(エペソ 1:15-16)

彼らは「すべての聖なる者たち」を愛していたということが分かる。同じ主を信じる者に対して惜しみない愛を注いでいたのです。しかし、いつからか愛の業がその群れに見られなくなっていった。ヨハネがそのような教会の状態を危惧していたのか、主イエスから見た教会の現状だったのか。エペソ教会がそのようなになってしまった理由として、彼らがあまりに異端に対して神経質になるあまり、人を寄せ付けない雰囲気の流れ始めていたことが考えられます。教会のリーダーは確かに群れを守る責任がある反面、来会者を温かく迎え入れる心も持ち合わせていなくてはなりません。このバランス感覚は重要なのですが、いずれかに傾いていく危険性を孕んでもいます。

私も地域の牧師会に参加するとき、先輩牧師たちがどのように牧会をされているか、興味深くお話を伺っています。私の姿勢とは全然違う方針で教会形成をされていることを知り、反省させられることもあれば、そこまでしなくてもよいのではないかと思うこともあります。弟子訓練において優れた能力をお持ちである反面、信徒さんが牧師にものを言えない状態になってはいないかという懸念を抱くこともあります。監視カメラを設置することは、トラブルを未然に防ぐことに成功するかもしれませんが、来会者から自由な心を奪ってしまうこともあるかもしれません。

これらのことは、教会が直面してきた問題への対処から生まれてきたスタイルであることが多いので、何が正しいかは決めることができません。大事なものはバランスなのです。エペソ教会は何らかの意味でバランス感覚を失ってしまっていた。「初めの愛を離れてしまった」のです。主イエスは「悔い改めないなら、私はあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけよう」という厳しいメッセージを語っておられます。「燭台」とは主の臨在のしるしでありますから、教会からそれが取り除けられるとは、もはや教会が教会ではな

くなることさえ意味するでしょう。キリストの栄光が失われた人の集まりになってしまう。賛美がささげられ、御言葉が継がれてはいるが、いつしか教会ではなくなっているということが起こりうる。神の愛が失われたなら、そういうこともあり得るのです。

しかし、読者はこのような宣告を聞いて、ただ恐怖を覚えるだけではないでしょう。主は教会に悔い改めを求めておられるのです。何としても主の愛に立ち帰らせ、教会を存続させようとしておられる。そこに人が集まり礼拝がささげられている以上、立ち帰る余地は十分にあるのです。この希望を私たちは聞き取らなくてはなりません。

耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。(2:7)

ヨハネからの手紙が礼拝の中で朗読されたとき、エペソ教会の信徒たちは襟を正してこれを聞き、自分のこととして捉える必要がありました。聞き流すこともできる。神のことばとして心で受け止めることもできる。聞く者は「勝利を得る者」と呼ばれ、信仰を全うしていくのです。聞く耳を持つ（柔軟に対応できる）ということは、信仰の道を歩み抜く鍵を握っているとも言えるでしょう。

「命の木」とは、エデンの園に生えている木であることが創世記2～3章から分かりますが、この木の実を食べる者は神からの命を受け続けることができる。つまり、死の力はその人に何の影響も与えることができないのです。創造の初めに人間が神との間に持っていた愛の関係がそこに取り戻される。永遠に生きる者となる。御霊の語りかけに耳を傾けるとは、それほど重要な意味を持つのです。

【結論】

今日はエペソ教会に対する主イエスからのメッセージに共に耳を傾けました。これを私たちが、第一世紀の一教会へのメッセージにすぎないと考えていたとしたら、「聞いた」ことにはならないでしょう。これは私たちへの何らかの語りかけでもあるのです。この群れの賜物と弱い点とをよく考え、理解していく必要があります。今私たちは群れとしてどのような状態にあるか。また、このことを更に突き詰め、個人への語りかけとしても聞くことができる。私たち一人ひとりが賜物を受けており、同時に弱さを抱えています。主イエスとの関係を探りつつ、よく自己吟味し、信仰の道を全うしたいと思います。

【祈り】

個人に、教会に、良き賜物を与え給う、天の父なる神様。私たち一人ひとりが主によって召され、この教会を形づくっています。そして、それがそのまま「キリストのからだ」であると聞き、襟を正されます。この群に与えられた賜物は、時に弱さとなるかもしれません。どこか不足している部分がありましたら、それをお示しくださり、改善していく知恵と柔軟な心とをお与えください。どんな時にもキリストの香りを放つ教会であることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
神の国の前進のため、各々の教会に良き賜物を与え給う、父なる神の愛、
弱さのあるところを示し、群れをご自分のからだにふさわしく整え給う、主イエス・キリストの恵み、
悔い改める者に勝利を得させ、命の木の実にあずからせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。